

日本的家族経営のススメ

世界はジャパンスタードを待っている！

株式会社アイパートナー 代表取締役 三村 邦久

5) 日本人のグローバル化

「信頼」は日本ブランド

今から50年前の1964年に新幹線が開通し東京オリンピックが開催されました。戦後日本は、質素儉約、勤勉で忍耐強く、誠実で礼儀正しいという日本人の気質が原動力になり、奇跡的な復興を果たしました。焼け野原から世界有数の先進国へと導いた日本人の高い精神性は世界に誇る大きな財（たから）といっても過言ではないでしょう。日本の十八番であった家電産業は今では劣勢を強いられています。電子部品、精密機械、自動車、工作機械、環境技術、町工場の匠の技、そして日本食は世界で存在価値を示しています。

これらのものに共通するのは、繊細さと高い信頼性でしょう。信頼できる製品や技術は、信頼できる人間によって作られます。その競争優位性の源泉は容易に真似ができない暗黙知であり、その本質にあるのは日本人の精神性や気質ではないでしょうか。世界から「日本人の心」に対する信頼性が「JAPANブランド」になっているように思います。

また震災などの大災害に遭ったときには、救援物資を奪い合わず列をなして待ち、避難で空き家が

できても盗難もほとんどない。これは正義を重んじ、和を大事にする国民性の表れでしょう。

しかし、戦後は民主主義の浸透とともに個人主義から利己主義へと行き過ぎた感があります。日本は聖徳太子が「和を以て貴しとなす」と定めた頃から人の和を大切にしてきました。現代でもKY(空気が読めない)などという言葉が流行になるのは、和を大事にする日本の伝統文化によるものでしょう。また伊勢神宮や出雲大社に参拝する若者がたくさんいることなどを見ても、世代は変われども日本人の血が生きづいていることを感じずにはおられません。いかにグローバル時代になったとはいえ、盲目的に西洋の思考や手法を真似るのではなく、日本が武器にすべきは日本人のアイデンティティーなのではないでしょうか。

日本人の心を取り戻す

今、グローバル人材の育成は、多くの企業の重要経営課題です。郷に入れば郷に従えの如く、言葉を学び文化・商習慣を学ぶことは必要不可欠なことです。しかし、世界各国でグローバル展開されている企業の方が異口同音に言われるのは、「海外で一目置かれ尊敬

—ここでの家族経営とは、同族で利益を独占する公私混同の経営を指すのではなく、社員を家族のように大事にする人間的経営を言う—

- 1) 金と人、どっちが大事
- 2) 自主と自由、人間の尊厳を守る
- 3) 個性を潰す評価制度
- 4) 匠、仕事を極め楽しさを追求する
- 5) 日本人のグローバル化
- 6) 日本人のメンタリティーを活かす

されるために必要なことは、日本の文化や歴史を語れること」です。つまり、自国の文化や歴史を、正しく知らないようでは、外国人からは「教養がない」として認められません。まして自虐的で自国へ誇りのない人間は尊敬されないということです。

近代のグローバル化の第一歩となった明治維新のとき、若きリーダーは国を代表して欧米に訪れ、様々なことを学びました。しかし、同時に日本とはどんな国であるかを必死に伝えてきました。例えば、新渡戸稲造氏はクリスチャンでしたが、『武士道』という本を通じて日本の文化を世界に示しました。内村鑑三は『代表的日本人』を、岡倉天心は『茶の本』を英語で著して、日本の素晴らしさを世界に発信しました。

なかでも武士道は日本の代名詞で、その源流は神道・禅仏教・儒教にあり、高き身分の者に伴う義務、人としてのあり様(倫理・道)、勇猛果敢なフェアプレーの精神を説いています。

- ①義 (高潔で厳しい父性、道理に従い行動する意志の強さ)
- ②勇 (不屈、勇敢、沈着、平静、穏やかな心)
- ③仁 (優しく柔和な母性、慈愛、



寛容、情け)

- ④礼 (他を思いやる心、謙虚さ、丁寧さ)
 - ⑤誠 (嘘・ごまかし・二言がない、正直は最善の策)
 - ⑥名誉 (知識とか富みではない人格の尊重、廉恥心)
 - ⑦克己 (忍耐と不屈の精神、誰にも負けない優しさ、静かな心)
- この精神を持った先人が、今日の日本という国をつくってきたのです。

「ものが言えない」日本人

武士道では多言を嫌い、不言実行を旨としてきました。日本はほぼ単一民族の国であり以心伝心が通用しましたが、多民族異文化の大陸では言葉を交わさないと意思疎通が図れません。また、和を大事にする日本社会に対して、諸外国は優勝劣敗の競争社会です。大陸の国は容易に他国に侵攻することができ、民族・宗教・イデオロギーの違いによって主権争いが常に発生します。そんな社会ですから、譲ってはいは直ちに負けてしまうので、常に自分たちの主張を通すことでその地位や利益を守ろうとします。日本人が好むと好まざるとにかかわらず、それが現実でしょう。

たとえ言葉ができなくても、通



三村邦久(みむら くにひさ) 社長参謀

1961年兵庫県生まれ。酒米の王様「山田錦」を育てる父親の愚直な働き方を見て育つ。神戸商科大学(現兵庫県立大学)卒業後、電子部品メーカーに就職。27歳で中小企業診断士資格を取得、経営コンサルタントに転身。中小・中堅企業に対し、業務のIT化、経営管理、評価賃金などの経営システムを構築し、組織運営の円滑化に貢献する。経営の継承、新規事業立上げにも携わり、社長の「夢と悩み」を共有し、会社と人の天性を醸化させることをモットーとしている。著書『愚直経営で勝つ! 経営者9人のチャレンジストーリー』(PHP研究所)

▶座右の銘「収穫を問う莫かれ、但だ耕耘を問え」

訳を使い議論をする。多様性を受け入れつつも、自分の意見は主張する。でなければ、相手のペースに巻き込まれ主導権を握られて冷や飯を食うことになるでしょう。

また、日本では就職(実態は就社)すると、会社からの辞令に無条件で従う暗黙のルールがあります。自ら自分のキャリアを作るのではなく、自分の運命は会社任せ。となると会社の方針や上司の意見に異議を唱えることなどほとんどなく、自分の主義主張を押し通す人は少数派です。強行に意見を主張する人は相当KYな人か、どこでも生きていけるほど腕に自信のある人でしょう。

「ものが言えない」日本人の習性は、グローバルの競争下では大きなネックとなります。資本主義の世界では、自らの利益の最大化のためにもものを言うのは当たり前。しかし、渋沢栄一翁が残した『論語と算盤』にあるように、日本人は道徳性の伴わない利益は悪であると考えています。つまり社会性を重視し、利己利益追求のためだけの主張は矛先が鈍ります。

日本人の人間力を取り戻す

幕末に諸外国から侵略されそうになったときに、日本の将来を憂い立ち上がったのが幕末志士でした。では彼らの心にどんな思想が流れていたのかを思い起こす必要があります。

当時、長州藩の精神的支柱になった吉田松陰の座右の銘は「至誠」です。その原点は中国古典孟子の「至誠にして動かざる者は、未だこれあらざるなり」にあります。誠とは嘘偽りがない。真心をもって言行一致であるということ。誠実さを極める。そんな生き方をすれば、誰でも自分の考えを理解し、納得して協力してくれる。そういう意味です。

一方、幕府側のリーダーであった勝海舟もこんな言葉を残しています。「政治家の秘訣は、何も無い。ただただ正心誠意(せいしんせいせい)の四字ばっかりだ。この四字によりてやりさえすれば、たとえいかなる人民もこれに心服しないものはないはずだ」(氷川清話)と。つまり、政治でもビジネスでもリーダーシップを発揮するうえで大事なことは、邪な心を排除し、自分の利益のためではなく、他人や社会の利益のために働く。その結果として会社の安定、社員の幸せを実現する。正しいことを誠実に勇気を持って実践する。これが日本人としての生き方の美学でしょう。

グローバルの時代だからこそ、我々は日本人の高い精神性を見直し、家庭で道徳心を育み、職場で高い倫理観を実践する。そこに、西洋の科学的な技術や手法を加え活かしていくことが大切なのではないでしょうか。